



平成17年 1月30日発行

発行者

社団法人 新潟県植物防疫協会

〒951-8133

新潟市川岸町三丁目21番地3

新潟県農業共済連内

☎ 025 (233) 2839 (直通)

FAX 025 (233) 8018

## 平成17農薬年度の価格交渉について

平成17農薬年度（平成16年12月～平成17年11月）の価格について、全農全国本部は、平成16年7月中旬からメーカー各社と交渉を行ってきました。

原油などの高騰により交渉は難航しましたが、競争にさらされている品目を中心に、以下のとおり価格を引き下げました。

### 1. 決定内容

- (1) 担い手農家対策の強化を図るため、茎葉処理除草剤の一部大型規格について価格を引き下げました。
- (2) 「競争に負けない価格」の実現のため、ホームセンター等との競争が激しい剤については、価格実態調査の結果をふまえて交渉し、価格を引き下げました。
- (3) 原油価格の影響を大きく受ける銅含有剤や機械油乳剤は、値上げ幅の抑制を図りました。



だいこんへこみ症(仮称) (関連記事3頁)

### 2. 交渉概要

- (1) 農薬メーカーは、①11年連続の価格引き下げで、合理化努力も限界にきており経営は非常に厳しい、②原油などの高騰により原料価格が値上がりしている、③既登録農薬の登録維持試験や環境安全対策の経費が増大している、ことから値上げを要求してきました。
- (2) 全農全国本部は、①厳しい農業・農家経済を巡る情勢のなか、農家組合員から目に見える生産資材価格の引き下げを求められている、②登録維持試験や環境安全対策は、メーカーの責務であり、③原油価格などの高騰による原料価格の値上がりはあるが、多くの製品に対する影響は軽微であることなどを主張しました。

### 3. 品目別交渉結果

- (1) 全国本部交渉による値下げ: 4品目(△3.7%～△12%)

コラトップジャンボ 500g	水稻殺菌剤	△3.7%
ランネット45DF 500g	園芸殺虫剤	△7%
バロックフロアブル 500g	園芸殺虫剤	△3.7%
モスピランSL液剤 500ml	園芸殺虫剤	△12%

### 《主な内容》

1. 平成17年度農薬の価格交渉について…………… ★
2. 未稿…………… ★
3. 近年発生が多い砂丘地ダイコンの根部障害 ★
4. 平成16年に病害虫防除所で実施した  
水稻特殊調査成績…………… ★
5. 平成16年度航空防除の実施状況について… ★
6. 平成16年度農薬実証ほ成績について…………… ★

- (2) 大型規格品の値下げ: 3品目 (△1%～△5%)

ラウンドアップハイロード20L	茎葉処理除草剤	△2%
バスタ液剤 2.2L	茎葉処理除草剤	△1%
ブリグロックSL 5L	茎葉処理除草剤	△5%

- (3) 地域ブロック交渉による値下げ

: 2品目 (△2%～△2.9%)

(競争に負けない価格設定による値下げ)

地域によってホームセンター等との競争が激しい品目について、価格実態調査を踏まえ、価格引き下げを行いました。

これら競争の激しい品目については、今後とも市況実態にもとづき随時価格交渉を行う予定です。

ダイシストン粒剤 3kg	園芸殺虫剤	△2%
エリジャン乳剤 500ml	水稻除草剤	△2.9%

- (4) 値上げ: 9品目 (0.7%～8.0%)

#### ① 銅含有剤 (6品目)

カスミンボルドー	園芸殺菌剤	0.7%
ドイツボルドーA	園芸殺菌剤	2.7%
デランK	園芸殺菌剤	1.0%
銅カル水和剤	園芸殺菌剤	1.8%
硫酸銅	園芸殺菌剤	8.0%
オキシラン水和剤	園芸殺菌剤	0.9%

#### ② 機械油乳剤 (3品目)

機械油乳97:ハーベストオイル, アタックオイル,スピンドロン, サマーシン97	園芸殺虫剤	0.84%
機械油乳98:ラビサンスプレー	園芸殺虫剤	0.84%
機械油乳95:機械油乳剤95	園芸殺虫剤	1.0%

(全農にいがた 肥料農薬課 藤田 秀明)

# 水稲育苗箱施用殺虫剤の最近の使用動向と問題点

育苗箱施用殺虫剤の主な対象害虫はイネドロオウムシとイネミズゾウムシですが、近年、この両種の発生量は極めて少ない状態が続いています（図1）。新潟県農薬流通実態調査のデータをもとに、薬剤1kgを10aに換算し、使用面積を推定しました（図2）。殺虫剤は県内のほとんどの水田で使用されています。種類別では、パダンが約6割を占めていますが、近年は減少傾向で、それに代わりプリンスが増加しています。その増加は、Dr. オリゼプリンスが増加したことによるものです。また、殺虫剤単剤が減少し、いもち剤との混合剤が増加しています。現在、育苗箱施用剤はごく一般的に使用されていますが、薬剤の選択や使用の可否がはたして適切なのか、改めて考える必要があるでしょう。

育苗箱施用剤は使用法が簡便で防除効果も確実である利点がありますが、その使用時には対象とする害虫の発生量が予測できないため、結果として防除が必要ない場面でも使用されることになり、過剰防除となりやすいことが大きな問題です。防除指針のイネドロオウムシの項には、「育苗箱施用はイネドロオウムシ常発地帯や前年多発地域に限る」とあり、ニカメイチュウでは「育苗箱施用は常発地帯及び前年10月下旬～11月の刈株の被害茎調査で防除が必要とされた地域に限る」とあります。つまり、育苗箱施用は、使用時における程度多発生が予想される場合にのみ使うという位置づけです。

それではなぜ、これほどの面積で使用されるようになったのでしょうか。一つは使用法が簡便で防除効果が高く、一方本田での粉剤散布が労力上難しいこと、防除可否を判断する基準（防除のめやす）がないこと（ニカメイチュウではある）があると思われます。また、イネミズゾウムシの本田防除剤は比較的高価な水面施用粒剤に限られることも一因として考えられます。

プリンス剤の増加の要因はどこにあるのでしょうか。プリンス剤はイネドロオウムシ、イネミズゾウムシだけでな

くニカメイチュウやイナゴ、ウンカ類にまで防除効果がある「長期持続型薬剤」です。ここまで長期にわたる防除効果が必要な地域はごく限られると思われます。図2にあるとおり、最近のプリンス剤の増加はDr. オリゼプリンスの増加によるところが大きく、薬剤の選定にあたっていもち剤のDr. オリゼの必要性が重視された結果と思われる。来年度から「いもち病に強いコシヒカリ」が普及に移され、平坦地では箱施用でいもち剤を使用する必要性はほとんどなくなります。現在混合剤を使用している場合も殺虫剤単剤の使用に戻ることになります。従って、箱施用剤の種類、使用の可否はイネドロオウムシ、イネミズゾウムシの防除の可否のみで判断できるようになります。

この2種の害虫について育苗箱施用剤による防除の可否を判断する基準はありません。しかし、現在のような極めて少ない発生量の状況で、地域のほとんどの水田で育苗箱施用剤の使用を続けることには疑問があります。思い切って、育苗箱施用剤の使用を中止してみてはどうでしょうか。中止することによって、発生量は増加してくることが予想されますが、イネドロオウムシ、イネミズゾウムシは年に1回の発生ですから、1年で急激に増加するとは考えにくい害虫です。使用を中止するとともに、綿密な発生量調査を行って、増加の兆候が認められ、相当のレベル（この判断がむずかしい）に達したら、育苗箱施用剤の使用を再開するという手法が考えられます。育苗箱施用剤の防除のめやすがなくとも、地域における綿密な調査とこれまでの知見を活用すれば、かなり精度の高い判断ができると思います。このような取り組みをいきなり市町村等の広い面積で実施するのは難しいと思いますので、集落単位でモデル的に実施してみてはどうでしょうか。

（作物研究センター栽培科 石本万寿広）

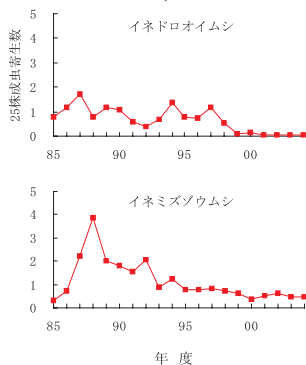


図1 イネドロオウムシ、イネミズゾウムシの発生量の年次別推移（防除所抽出調査）

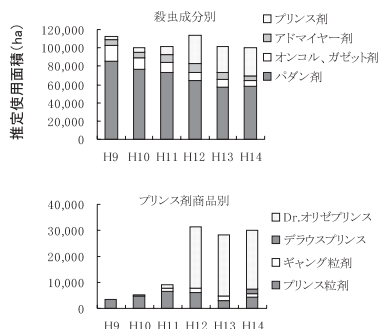


図2 各種育苗箱施用剤使用量の年次別推移  
注) 新潟県農薬流通実態調査データをもとにした推定値（育苗箱施用剤1kg=10a）、年度は農業年度

## 植防一口メモ

### 性フェロモン剤導入による果樹の害虫防除

南蒲原地域では、信濃川の河川敷を中心に、なし、もも、ぶどう等の果樹が約370ha栽培され、県内でもトップクラスの果樹産地を形成しています。

近年、消費者からは安全・安心な農産物生産が強く求められており、生産者からも化学農薬をできるだけ減らした、安全でおいしい果物を消費者に届けたいという気運が高まっています。

果樹の害虫防除では、性フェロモン剤の導入によって従来の殺虫剤散布回数を減らす試みが、全国的に進められています。

当地域でも、加茂市や田上町では性フェロモン剤「ハマキコンN」がなしに、「コンフューザーP」がももに既に導入されており、ハマキムシ類やシンクイムシ類の害虫防除に効果を上げ、発生量の減少が確認されています。本年度から三条市においても導入されることにより、管内のほとんどのなし園ともも園の約300haに性フェロモン剤が設置される状況になりました。

そこで、本年度からハダニ類やカイガラムシ類の天敵昆虫に影響の大きい合成ピレスロイド系殺虫剤の使用回数を減らそうと「複合性フェロモン剤を主体にした防除体系」の実証事業に生産者と関係機関が一体となって取り組んでいます。

このような産地の取り組みを消費者にも十分理解いただき、安全・安心な果物づくりがさらに定着していくことを期待します。

（南蒲原農業改良普及センター 品田 忠昭）



# 近年発生が多い砂丘地ダイコンの根部障害

はじめに

近年、新潟砂丘地のだいこんで根部異常症状（原因不明なものも含む）の発生が多く見られます。ここでは、昨年発生した主な症状を紹介します。

## 1 ヘこみ症（仮称、1頁写真）

平成4年頃から被害が報告されるようになり、近年その被害が拡大してきています。症状としては側根部付近にやや縦長の穴があき、その大きさは大小様々ですが、内部が深くえぐられたようになるものから、穴が開き陥没している症状もあります。

原因は不明ですが、は種15～20日後頃の皮層剥離期頃に側根部に病原菌が感染し、裂開したものが肥大に伴い穴あき症状にすすむと考えられています。



頭部～中央部のへこみ症状

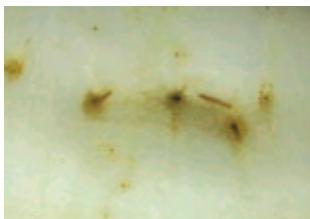


根部先端部のへこみ症状

## 2 ひげ根黒変症（仮称）

平成13年に発生が確認、翌14年には各地で多発生したもので、だいこんの側根が黒く変色し、程度が軽い場合は根内に入らず洗浄すれば落ちますが、重い場合は根内まで褐変症状が進行します。また、ひげ根の内部に空洞ができ、内部表面に亀裂褐変症状がみられるものもあります。

切ってみないと内部への褐変が確認できないため、加工だいこんではクレーム対象となります。原因は不明ですが、何らかの病原菌が関与しているものと考えられます。



ひげ根黒変症状



根内部への褐変症状

## 3 黒斑細菌病の感染による内部黒変

昨年、最も大きい被害が見られたもので、葉に水浸状の小斑点を生じ、次いで褐色、後に黒褐色に変わっていきます。病徴が進むと、葉柄基部から侵入したと見られる病原菌が、維管束部を通じて内部に拡大し、黒変症状を起こします。

肩部分に薄墨色の変色部が発生した場合は、内部黒変を起こしている割合は多いのですが、必ずしも表面の変色と内部の黒変は一致するわけではないので、外観から

の判断は極めて難しい病害の一つです。



肩部分の変色



内部の黒変症状

## 4 根くびれ病

生育の全期間に発生し、特に種30～40日後になると根部表面を取り巻くように褐変し、その部分がくびれる症状となり、高温期には内部の師部が縦に黒変している場合があります。病原菌は糸状菌で多湿条件で多発します。



根くびれ症状



亀裂褐変症状

## 5 亀裂褐変症

縦に深い裂根のような症状を伴う亀裂症状で、アファノマイセス菌やリゾクトニア菌等の病原菌が原因で発生します。根くびれ病同様、多湿条件で多発します。

（園芸研究センター環境科 中野太佳司）

### みちくさ

佐渡は宝の島 ～佐渡島をめぐるまわって～

赴任して2年、暇さえあればターボの愛車を駆って順徳上皇のゆかりの地、佐渡奉行所跡、薪能、鬼太鼓、二ツ亀、カンゾウ、雪割草など佐渡探訪を行っている。

今、最優先にしているのが、新佐渡四国八十八カ所（番外が二カ所あって90ヶ所）札所の寺院巡りである。

佐渡札所は文化12年（1815）小比叡（旧小木町）の善策らが四国霊場の土砂を持ち帰り、島内八十八カ所の寺院に奉納して開いたのが始まりで、戦後2回目の選定をへて今の90札所となっている。1番は国分寺に始まり、88番が大願寺（いずれも旧真野町）だが、南は宿根木、赤泊などの南佐渡地域から国仲平野を巡り、両津湾沿岸から外海府、相川七浦と島内全域に点在している。

寺院を探す道すがら、佐渡の地形、農業形態、植物の生育状況、集落の様子など様々の佐渡の姿が目に入り込んでくる。これらを反映して研究課題を立ち上げてと、別な面での夢がふくらんできている。

さて、札所巡りは拝観料は入らない（お賽銭は是非準備して）。連絡も不要。自由に見て回れる。そんな場所が佐渡にはいっぱいあって、自分風楽しめるすてきな場所である。みんな、佐渡の宝物探しに、こいつちゃ!!

（佐渡農業技術センター 小田切文朗）

# 平成16年に病害虫防除所で実施した水稻特殊調査成績

平成17年から「いもち病に強いコシヒカリ」が全面導入されます。いもち病の防除が大幅に縮減されることから、他の病害虫を含めた防除体系の見直しが各地で行われています。そこで病害虫防除所では、穂いもち防除の実証試験、及び斑点米カメムシの防除体系や発生実態の検討を4地域で実施しました。結論に至らず、継続調査の必要なものもありますが、ここに概要を紹介します。

## ◇「いもち病に強いコシヒカリ」の穂いもち防除実証 (南魚沼市)

いもち病常発地である南魚沼市(旧大和町)の「いもち病に強いコシヒカリ」作付圃場で、葉いもち無防除の場合の穂いもち防除の方法を検討しました。

粉剤(カスガマイシン・フサライド)の1回及び2回、粒剤(フェノキサニル)1回の3方法で比較した結果、いずれの処理方法でも穂いもちの発病は十分に抑えられました。試験圃場の葉いもちの発生は多く、発病株率は70%以上に達しましたが、穂いもちの発生程度はいずれの処理区でも発病穂率で1~2%程度と極めて低い発生でした。なお、調査圃場のいもち病は6月中旬に感染して下旬に発病、7月上旬に急進展しています。葉いもちの多発生に対して穂いもちはやや少なめの条件での検討となりました。

昨年は葉・穂いもちとも多発生の条件で同様の結果が得られており、「いもち病に強いコシヒカリ」は、いもち病常発地で葉いもちまたは穂いもちの1回防除でよいことが確認されました。

## ◇「いもち病に強いコシヒカリ」導入後の斑点米カメムシ防除体系 (聖籠町)

いもち病防除がなくなることを想定した防除体系の見直しについて、カメムシ類を中心に「ひとめぼれ」と「コシヒカリ」の2圃場で検討しました。(図1)

アカヒゲホソミドリカスミカメは出穂期前後に水田に侵入を始め、8月中旬まで続きました。特に8月中旬に畦畔に除草剤が散布されたことから、雑草の枯れ込みがカメムシを圃場に追い込んだと思われます。2回散布の1回目に有機リン剤を使った場合には密度回復が比較的早く、2回目散布を10日以内に実施する必要があると思われました。

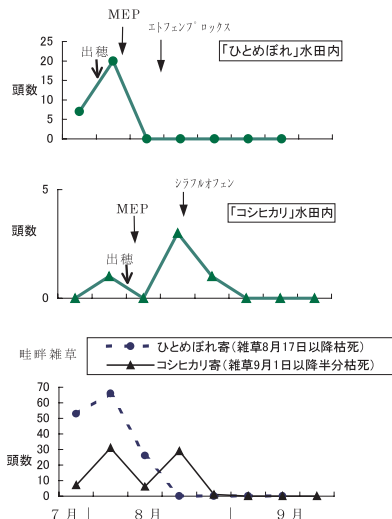


図1 アカヒゲホソミドリカスミカメの密度推移(20回すくい取り)

2回目に使われた合成ピレスロイド剤の密度抑制効果は高く、その後の水田内密度は低く推移しました。斑点米はいずれもほとんど発生しませんでした。

また、調査圃場ではセジロウカが8月上旬に急増し、有機リン剤の効果が十分ではなかったと思われました。出穂前の穂いもち防除がなくなると、同時防除剤としての殺虫剤が省かれるケースが多くなるとわれ、ツマグロ・ウンカ類、ツトムシなどの発生の推移に十分注意して適切に対応する必要があります。

## ◇航空防除に替わる、斑点米カメムシの新たな防除体系 (分水町)

西蒲原郡の航空防除地域では航空防除に替わる防除法として粒剤に注目しています。そこで斑点米対策として、粒剤によるカメムシ防除の可能性を検討しました。調査地域ではオオトゲシラホシカメムシ、ホソハリカメムシ、アカスジカスミカメなどが主に確認されました。穂揃期に粒剤(ジノテフラン)処理した場合と航空防除1回(シラフルオフェン)の場合とでカメムシ密度の推移に大きな違いはみられませんでした。しかし、カメムシ発生量の比較的少ない事例での調査になったため、多発生条件で再検討が必要と思われます。

## ◇新しい斑点米カメムシ「アカスジカスミカメ」の発生消長 (佐渡市)

アカスジカスミカメは平成12年に佐渡で初確認されて以来、全県的に分布の拡がりが見られ、特に佐渡地域では密度が急上昇しています。他県では斑点米発生の重要種としている県もありますが、新潟県の斑点米にどのくらい重要なカメムシなのか、まだほとんどわかっていません。

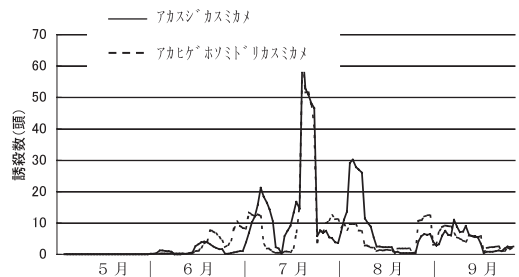


図2 佐渡市中興におけるアカスジカスミカメ誘殺消長(H16、予察灯)

そこで佐渡地域で発生消長や水田侵入の経過を追いました。その結果、外見はアカヒゲホソミドリカスミカメと似ていますが、発生時期など、いくつかの違いが明らかになりました。①予察灯の誘殺消長から、年4回発生と想定されます。越冬世代：6月第1~3半旬、第1世代：7月第1~5半旬、第2世代：8月第1~4半旬、第3世代：9月第1~3半旬で、初期の頃の発生はアカヒゲに比べてやや遅めです。(図2) ②畦畔雑草では5月上旬に若齢幼虫が確認されて以降、ほぼ全稲作期間を通して成幼虫が確認されましたが、畦畔の草刈りや薬剤防除によって密度が低下しました。③水田内では、わずかに成虫が確認されましたが、幼虫は全期間を通して確認されませんでした。

今後は調査データを積み重ね、アカスジカスミカメの全貌をもっと具体的なものにしなければなりません。

(病害虫防除所 山代千加子)

# 平成16年度航空防除の実施状況について

## 1 作物別実施状況

平成16年度の航空防除は、水稲病害虫及び松くい虫防除が実施されました。実施面積は表1のとおり延べ51,404haで、44市町村において実施されました。

(表1) 平成16年度航空防除作物別実施状況 (面積: 延、ha)

	水 稲		松くい虫		その他(牧野施肥)		合 計	
	市町村	実施面積	市町村	実施面積	市町村	実施面積	市町村	実施面積
平成16年度 (実施)	33	50,287	14	1,117	0	0	44	51,404
前 年 比	△10	△16,341	△5	△46	0	0	△10	△16,387

## 2 水稲の航空防除実施状況

- (1) 水稲の航空防除は33市町村において延べ50,287haが実施され、前年対比16,341haの減少となりました。これは、無人ヘリなどの代替防除への切り替えや発生予察に基づくいもち病防除の中止、他作物の実態にあわせた散布区域の見直し、水害等の発生による中止などによるものです。また、実施市町村数は合併などの関係もあり33で昨年対比10市町村の減、関係農家数は2万9千戸余りになります。
- (2) 防除は7月18日の葉いもち病、カメムシ等の防除に始まり、8月10日の穂いもち、カメムシ等防除を最後に全防除計画を無事終了しました。時期別割合は表2のとおりであり、7月後半から8月前半の穂いもち防除が全体の94%を占めています。なお防除回数は全実施主体平均1.7回でした。
- (3) 散布薬剤は普通物のみで劇物使用はありません。また

剤型別では液剤散布が41.5%、液剤少量散布が58.5%でした。

- (4) 航空防除を実施するにあたっての安全対策は、県航空防除安全対策実施要領を遵守し、次の通り実施されました。

(表2) 平成16年航空防除(水稲)実施状況

	市町 村数	実施延 面積	左の時期別 (%)			剤型 (%)		散布除 外地区 (面積)
			7/前半	7/後半	8/前半	液剤	液少	
平成16年度 (実施)	33	50,287	6.0	31.7	60.3	41.5	58.4	3,041
前 年	43	66,628	3.2	41.6	55.2	54.1	45.9	3,560

ア、散布除外区域は626カ所(1市町村平均19カ所)、4,965ha(実面積)が実施され、学校、幼稚園、病院など周辺を除外する措置がとられています。またプールなどへの飛散防止対策も172カ所で実施されました。

イ、広報活動は全市町村において実施され、広報紙、チラシ、をはじめ広報車、立看板なども利用して徹底が図られています。

ウ、学童などの通学・通勤に併せた散布中断時間帯が全市町村において実施され、また交通整理員が通勤通学道、一般道を合わせて1,073カ所に配置されました。

なおこれらの対策がなされた結果、航空防除による事故発生は気象急変による再散布が1件あったのみでした。

- (5) 本年度の防除経費は(10a当たり1回平均)は、散布料526円、農薬費917円、その他516円、合計1,956円でした。

(植物防疫協会 事務局)

# 平成16年度大型無人ヘリコプターによる防除について

大型無人ヘリコプターによる病害虫防除は、表のとおり水稲で10市町村延べ6,804ha、前年比11%の増、大豆では4市町村延べ260ha実施されました。大豆では水害等により当初計画525haに対し約1/2の実施となり、前年比13%減でした。

防除機体数は実質7機運行を余儀なくされました。

(表) 大型無人ヘリコプター作物別防除実績

	実 施 市町村	実施面積	実施期間	対象病害虫
水稲	10	6,804ha	6/10~8/10	いもち病、紋枯病、カメムシ等
大豆	4	260	8/5~9/9	紫斑病、害虫類
計	12	7,064		

(植物防疫協会 事務局)



# 平成16年度農薬実証ほ成績について

平成16年度の農薬実証ほでは、殺菌・殺虫剤31剤、除草剤13剤の合計44剤について延べ86か所で検討し、その普及性を防除効果ならびに作業性等から評価した。

## 殺菌・殺虫剤

### 1 水稻（7剤）・大豆（2剤）

いもち病に強いコシヒカリを対象としたビルダープリンス粒剤は、いもち病に対して対照剤と同等の効果が認められ、普及性があると思われた。ブイゲットアドマイヤー箱粒剤、ブイゲットプリンス粒剤6は、葉いもちに対して対照剤と同等の効果が認められ、普及性があると思われた。ウインアドマイヤーグレート箱粒剤は、紋枯病に対して対照剤と同等効果が認められ、普及性があると思われた。いもち病に強いコシヒカリを対象としてアチーブ粒剤の3kg/10a施用は、穂いもちに対して対照とした同剤4kg/10a施用と同等の効果が認められ、作業性は良く普及性があると思われた。

初期害虫に対してアドマイヤー顆粒水和剤及びガゼットMCフロアブルは、作業性にやや難があるものの対照剤と同等の効果が認められ、普及性があると思われた。斑点米カメムシ類に対して、ブラシダントツH粉剤は、対照剤と同等からやや優る効果が認められ、普及性があると思われた。ただし、アカスジカスミカメが収穫直前に大量発生した一例では、十分な斑点米抑制効果が得られず、同種の生息地帯では注意が必要である。

大豆の紫斑病に対して、アミスター20フロアブルの無人ヘリ散布及びマネージトレボン粉剤の地上散布は、対照剤と同等の効果が認められ、普及性があると思われた。

### 2 野菜（11剤）

ねぎのべと病に対してフェスティバルC水和剤は、対照剤と同等の効果が普及性が高いと思われた。きゅうり及びイチゴのうどん粉病に対してパンチョTF顆粒水和剤は、対照剤と同等からやや優る効果で、ローテーション薬剤として普及性が高いと思われた。ただし、既存のローテーション薬剤と同一成分が含まれるため、総使用回数に注意が必要である。トマトの葉かび病に対してドーシャスフロアブルは、対照剤と同等からやや優る効果で普及性が高く、疫病に対しても普及性があると思われた。いちごのうどん粉病、灰色かび病に対してインプレッション水和剤は、対照剤に比べ効果は劣るものの、生物農薬であることを考慮すれば普及性があると思われた。なお、生物農薬の評価方法について、今後、検討が必要である。

ねぎのネギハモグリバエ、ネギアザミウマに対してダントツ粒剤は、対照剤と同等からやや優る効果で普及性が高いと思われた。トマトのハモグリバエ類に対してアクタラ粒剤5は、対照と同等からやや優る効果で普及性が高く、コナジラミ類に対しても普及性があると思われた。カリフラワーのコナジラミに対してプリンスフロアブルは、対照剤と同等からやや優る効果で普及性が高いと思われたが、低密度時の使用が大切である。アスパラガスのハスモンヨトウに対してカスケード乳剤は、対照剤と同等の効果が普及性があると思われたが、低密度時の使用が大切である。なばな類のアブラムシ類に対してモスピラン水溶剤は発生初期散布剤として、また、スタークル粒剤は播種時処理剤として、少発生条件ながら対照（無処理）より発生が少なく、普及性があると思われた。

### 3 果樹（9剤）

かき（平核無）の落葉病に対してピオネクトは、対照剤と同等の効果が普及性が高いと思われた。かき（平核無）のうどん粉病及び落葉病に対してオンリーワンフロアブルは、対照剤と同等の効果があると思われ、普及性があると思われた。ぶどう（巨峰）のべと病、晚腐病に対してドーシャスフロアブルは、対照剤と同等の効果が普及性が高いと思われた。もも（白鳳）の灰星病、ホモブシス腐敗病に

対してオンリーワンフロアブルは、対照剤と同等の効果が認められ普及性が高いと思われた。黒星病に対する効果は確認できなかった。おうとう（佐藤錦）の灰星病に対してオンリーワンフロアブルは、対照剤と同等の効果で普及性が高いと思われた。なし（幸水）の黒星病、赤星病に対してマネージDFは、対照剤と同等からやや優る効果で普及性が高いと思われた。

かき（平核無）のチャノキイロアザミウマ、カキクダアザミウマに対してダントツ水溶剤は対照剤と同等の効果で普及性が高いと思われた。なし（二十世紀）のアブラムシ類、シンクイムシ類、コナカイガラムシに対してアクタラ顆粒水溶剤は対照剤と同等の効果で普及性が高いと思われた。いちじく（榊井ドーフィン）のキボシカミキリ幼虫に対してバイオセーフの6月上旬処理は、対照（無処理）に比べ効果が認められ、普及性が高いと思われた。秋（9月上旬）処理については、翌年春の調査で効果判定を行う。

### 4 花き（2剤）

チューリップの球根腐敗病に対してベンレートT水和剤の球根浸漬処理は、対照剤と同等からやや優る効果で普及性が高いと思われた。ユリのアブラムシ類に対してスタークル顆粒水和剤は、対照剤と同等からやや優る効果で普及性が高いと思われた。

## 除草剤

### 1 水田（11剤）

フォーカスショットジャンボは、対照剤とほぼ同等の効果で、初期一発処理のジャンボ剤として普及性が高いと思われた。エリジャンEW乳剤は、対照剤と同等からやや優る効果で、初期剤として普及性が高いと思われた。ダッシュユワフロアブルは、対照剤と同等の効果で、初期剤として普及性が高いと思われた。ダブルスターSB顆粒は、対照剤と同等からやや優る効果で、初中期一発処理剤として普及性が高いと思われた。ボス1キロ粒剤は、対照剤と同等の効果で、初中期一発処理剤として普及性が高いと思われた。イッテツフロアブルは、対照剤と同等の効果で、初中期一発処理剤として普及性が高いと思われた。パワーウルフ1キロ粒剤は、対照剤と同等からやや優る効果で、初中期一発処理剤として普及性が高いと思われた。ダイナマンD1キロ粒剤は、対照剤と同等からやや優る効果で、初中期一発処理剤として普及性が高いと思われた。リードゾン粒剤は、対照剤と同等の効果で、初中期一発処理剤として普及性が高いと思われた。クサトリーDXジャンボは、対照剤と同等からやや優る効果で、初中期一発処理のジャンボ剤として普及性が高いと思われた。ザーベックスDX1キロ粒剤は、対照剤と同等からやや優る効果で、直播栽培用除草剤として普及性が高いと思われた。

### 2 大豆（1剤）

雑草の生育初期処理剤としてハービー液剤は、無処理比0.5～7%の抑草効果で、一部、飛散による下葉の黄化が認められるものの収量への影響はなく、普及性は高いと思われた。（経営普及課 原澤良栄）

## 編集後記

平成16年は災害が相継ぎ、天災は忘れた頃にやってくるという言葉さえむなしく聞こえてしまうほどでした。厳しくつらい年であっただけに、新しい年への期待も大きくなります。17年度からはいもち病に強いコシヒカリに全面切り替わります。新潟をもっと積極的に売り出すチャンスです。何よりも努力と汗が報われる年でありたいと願っています。